

## Ovarian Vein Thrombosis:

### Incidence of Recurrent Venous Thromboembolism and Survival

卵巣静脈血栓症: 静脈血栓塞栓症の再発率と生存率

Lenz CJ, et. al. Obstet Gynecol 130:1127–35, 2017.

卵巣静脈血栓症 (Ovarian vein thrombosis、OVT) は、骨盤内炎症性疾患や産褥が原因とされてきたが、最近では婦人科手術や骨盤内悪性腫瘍が重要な原因疾患として注目されている。その頻度は一般人口では 0.18%、妊婦では 1/600~2000 と報告されている。しかし、その危険因子や再発率を含む OVT の自然史は十分に理解されていないため、臨床現場で OVT 症例を治療、管理するための最適な指針がほとんどないのが現状である。本研究の目的は、OVT における静脈血栓塞栓症の再発、肺血栓塞栓症、死亡リスクを検討することである。

Mayo Clinic において 1990 年 1 月~2015 年 10 月に診断した OVT 患者を症例群、年齢、診断時期をマッチさせた女性下肢深部静脈血栓症 (Deep vein thrombosis、DVT) 患者を対照群とし、病因、血栓部位、治療、静脈血栓塞栓症の再発、生存期間を評価した。

本研究の期間中、OVT は 219 例、下肢 DVT は 13417 例に認められた。下肢 DVT 患者のうちランダムに抽出した 220 例を対照群 (DVT 群) とした。追跡期間中央値は、OVT 群は 1.23 年 (四分位範囲 0.25-4.14)、DVT 群は 3.31 年 (同 1.00-7.48) であった。年齢は OVT 群で 50.8±18.0 歳、DVT 群で 51.7±18.1 歳 (P=0.61)、肺血栓塞栓症は OVT 群で 14 例 (6%)、DVT 群で 36 例 (16%) 認められた (P=0.001)。OVT の原因は、悪性腫瘍、ホルモン療法、手術、入院が多かった。OVT 群では、悪性腫瘍合併症例が 96 例 (44%) で DVT 群の 46 例 (21%) と比べ 2 倍高かった (P<0.01)。妊娠は OVT 群 26 例 (12%)、DVT 群 15 例 (7%) で両群に有意差を認めなかった (P=0.07)。抗凝固療法を受けた患者の割合は OVT 群 118 例 (54%) が DVT 群 216 例 (98%) より有意に少なかったにもかかわらず、静脈血栓塞栓症の患者 1 名における 1 年あたりの再発率は両群で同等であった (患者 1 名 1 年あたり OVT 群 2.3/100 vs. DVT 群 1.8/100、P=0.49)。抗凝固療法を受けた OVT 症例において、静脈血栓塞栓症の既往と手術は、その後の静脈血栓塞栓症再発の独立した危険因子であることが多変量解析で明らかになった (各々ハザード比 6.7、P<0.05 ; ハザード比 13.6、P<0.05)。重篤な出血イベントは OVT 群で 2 例 (抗凝固療法あり 1 例、なし 1 例)、DVT 群で 7 例 (全例抗凝固療法あり) であった。全生存期間において、OVT 群と DVT 群では有意差を認めなかったが、OVT 症例では悪性腫瘍合併症例は非合併症例と比べて短かった (P<0.01)。

OVT は、下肢 DVT と比べて発症率が 1/60 とまれである。悪性腫瘍を合併した OVT 症例は、悪性腫瘍が全生存期間を短縮する。特に静脈血栓塞栓症の既往や手術症例では、直接経口抗凝固薬やビタミン K 拮抗薬による抗凝固療法を行った方が良い。

OVT は産褥期、骨盤内手術、悪性腫瘍に合併することがあるが全例に抗凝固療法を行った方がよいかどうかまだコンセンサスが得られていない。しかし、少なくとも OVT の既往がある症例では、次の妊娠分娩時、手術時には抗凝固療法を行った方が良いと考えられる。

(2022 年 10 月 文責: 評議員・幹事 小田智昭)